中学校期における子どもの攻撃性とその心理社会的要因

B96-4509　佐藤純子　　(指導教官　朝倉隆司)

1.　目的

本研究では、いじめや暴力、さらに最近話題にのぼる「キレる」現象など、中学校で問題となっている子どもの攻撃性に着目し、子どもの攻撃性が解発される背景、また抑制される背景にはどのような心理社会的要因があるかを検討する．さらにそれらの心理社会的要因と中学校期における学習体験の関係を検討し今後の中学校教育のありについて考察する．

2.　研究方法

東京都、神奈川県に所在する公立中学校３校の３年生545名に対し、攻撃性とそれに関係する心理社会的因子を文献から調査し、質問項目を作成して調査した．分析方法として、統計パッケージSPSSにより単純集計、クロス集計、相関係数、χ^2検定を行なった．相関を調べる際には各因子の測定尺度を得点化し、その合計得点間で相関係数を算出した．

3.　結果と考察

＜攻撃を解発する心理社会的要因＞

●表１　攻撃性得点と各解発因子との相関係数

解発因子	成育歴	自己否定感	不信感
男子	.168*	-.090	.361*
女子	.167*	-.179*	.390*

*は1%水準で有意な相関である

●表２　ストレス状態と攻撃性平均得点値の比較

ストレス状態	低い	やや低い	やや高い	高い
攻撃性平均得点	41.1905	42.7917	47.1481	50.9138

4評定間差はいずれも5%水準で有意

攻撃性を解発すると考えられる４因子と攻撃性得点との相関について調べたところ，表１・２のような結果を得た．

成育歴では，家族（両親，兄弟など）から連続的に暴力を受けてきた経験のある生徒は、攻撃性得点が高いという関連が見られた．これは，最も身近な存在である家族の行動スタイルが，モデリングの対象となっている場合，または虐待などによる自暴自棄の現れが要因として考えられる．**自己否定感**が強いと攻撃性は高くなるという関連は女子にのみ見られた。自分を認められないという卑屈な心理状態では、ささいなことにも傷ついてしまい，怒りを管理したり他人を思いやることが難しい．また他人を攻撃し，けおとすことで自分の価値をあげようとする心理が攻撃性を高めると考えられる．**社会，人間に対する不信感**は，思春期の発達段階において強まりやすい．不信感が被害者意識を強め，自分を傷つけるものは許せない，という心理状態が攻撃行動を引き起こすことがある．表２に示すように，**ストレス状態**が高いほど攻撃性得点が高いという結果を得た．不快な感情の表現あるいは発散として攻撃的になると考えられる．

このような要因は、自己を守るための防衛機制によるものと考えられる．

＜攻撃を抑制する心理社会的要因＞

●表３　攻撃性特典と各抑制因子との相関係数

抑制因子	共感性	社会適応力	自己コントロール感
男子	-.087	-.328*	-.318*
女子	-.178*	-.509*	-.495*

*は1%水準で有意な相関である

攻撃性を抑制すると考えられる３因子と攻撃性得点との相関について調べたところ、表３のような結果が得られた．

共感性が高いと攻撃性は低いという関連は女子にのみ認められた．共感性が高いと人の痛みも感じやすいため攻撃性を抑えられるが、共感反応を引き出す外的手がかりにいかに敏感であるか、ということの方が直接的な抑制因子となるため関連が低かったと考えられる．**社会適応力**は高いほど攻撃性が低いという強い関連が認められたが、集団生活に適応しているほど、他と協調する方法を知っており、自己コントロールスキルを備えていると考えられる．**自己コントロール感**は、攻撃性を管理する上で最も重要な因子であり、成長していく過程でそのスキルが養われる．日頃から感情をコントロールすることの重要性を感じており、怒りを感じた時でも自己抑制が働く生徒ほど攻撃性が低くなっているという関連を得た．

＜学校の諸活動が与える攻撃性、共感性の影響＞

●表４　(例) 部活動が子どもに与える心的影響

	YES (%)	攻撃性	共感性
友情の深まり (+)	58.0	低	高
人間関係問題 (-)	48.1	高	低

中学校で行なわれる諸活動ごとに、「友情が深まったか(+)」「人間関係の難しさを感じたか(-)」という質問を行なった．部活動を例にとると、友人関係はプラス面もマイナス面も比較的高かった。またプラスに感じた生徒は、参加していない生徒に比べ攻撃性が低く、共感性が高くなっていた。逆にマイナス面を感じた生徒は攻撃性が高く、共感性が低くなっていた。仲間との活動は、両面性をはらんでいる。マイナス面を克服させるような環境設定を行なうことが教師の役目であると考える。

4.　結論

中学校期は思春期にあたり、精神的に不安定な時期である。そこで学校において攻撃解発因子を克服させ、抑制因子を高めていくようなサポートと環境の提供が教育活動に求められる．

攻撃性を含め感情をコントロールする能力は、人間関係を通して育まれる。中学校における諸活動ではクラスやグループ、クラブの仲間と協力し合い学習する機会をより多く与えながら、子どもたちが自ら、自己をコントロールし攻撃性を管理していく能力を獲得する手助けをしていく必要があると考える．